

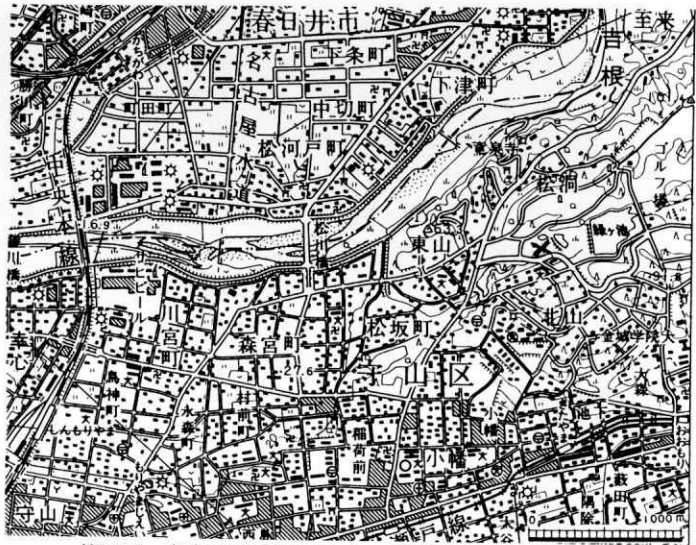
〈資料紹介〉

名古屋市守山区小幡出土の灰釉陶器

橋崎 彰 一

1. はじめに

愛知県陶磁資料館に寄贈された陶器類のなかに名古屋市守山区小幡の緑地公園内の一火葬墳墓から出土した2点の灰釉陶器がある。この灰釉陶器類が出土した直後、県教育委員会から報告を受けた筆者は現地に赴き、発掘者からその出土状況について聞き取りを行ったが、その後、その陶器類の行方が不明のまま年月を経過した。先年、その発掘に携わった関係者から、出土した灰釉陶器が寄贈されたの



第1図 出土地付近現況図 (×印出土地, 5万分の1)



第2図 発見当時の地形図 ×印出土地, ●印右上・松ヶ洞古墳群, 左下・川東山古墳群。(図は『守山の古墳』1963より)

で、この際、出土の状況およびその灰釉陶器類について、簡単な報告を行っておきたい。

はじめに、筆者がこの調査を行った経緯について説明をしておきたい。昭和35年8月25日、県土木部計画課公園緑地係長横田敏氏から小幡の県緑地公園から火葬骨の入った壺が出たのを見てほしい旨の連絡が県社会教育課を通じて筆者のところにあった。そこで筆者は3月26日現地に赴き、調査を行うと同時に、発掘を行った小杉勉氏から出土の状況について説明を受けた。小杉氏の説明によると、当該火葬墳墓は昭和35年3月23日午前11時ごろ、小幡緑地公園（現在、児童公園になっている）内の斜面整地中に、地表下50cmくらいから発見されたという。

なお、今回の報告を執筆するに当たって、すでに長い年月を経ているところから、この陶器の寄贈者である一盛昭男氏（当時、公園事務所主任）から改めていろいろ御教示を得たことを銘記し、厚く謝意を表す。

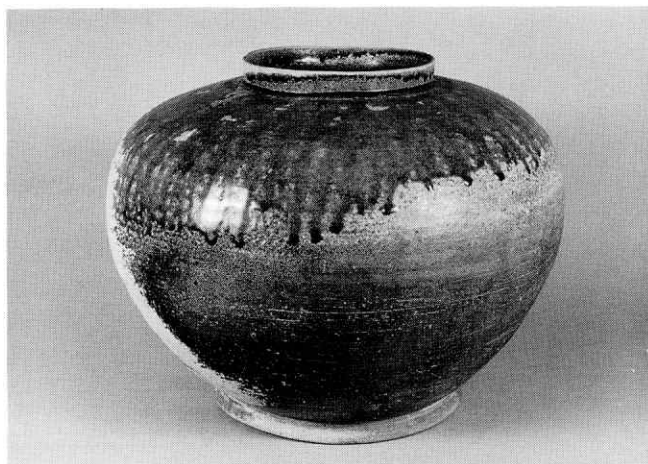
2. 遺跡の位置と環境

この火葬墳墓が発見された場所は県緑地公園内の西南部、竜巻池の西側の丘陵上にある。地籍は名古屋守山区小幡牛牧字離れ松に属する。

いま、局地の状況を説明するに先だて、周辺の地形ならびに歴史的環境について概要を記しておこう。庄内川と名古屋市街地の北を限る矢田川に挟まれた守山丘陵は瀬戸市の北部丘陵（標高100m前後）から細長く西方に続く低い丘陵の西端にあって、標高80m前後の丘陵地帯とその西に一段低く続く洪積台地およびその南北に広がる沖積地に分れる。この洪積台地上には西から白山古墳、瓢箪山古墳、長塚古墳、池下古墳など長さ80m前後の前方後円墳が台地の南縁に沿って並んでおり、その東方の丘陵地帯には後期の群集墳約50数基がいくつかの群に分かれて営造されている。これら一群の古墳群は守山古墳群と呼ばれて尾張部における一大古墳群を形成している。また、洪積台地の中央部には縄文時代晩期の牛牧遺跡があり、台地の東北端には古墳時代に属する牛牧離れ松遺跡がある。また、台地中央部の南縁には守山廃寺がある。このように縄文時代から歴史時代にかけて各時代の遺跡がこの台地



写真(1) 灰釉平瓶



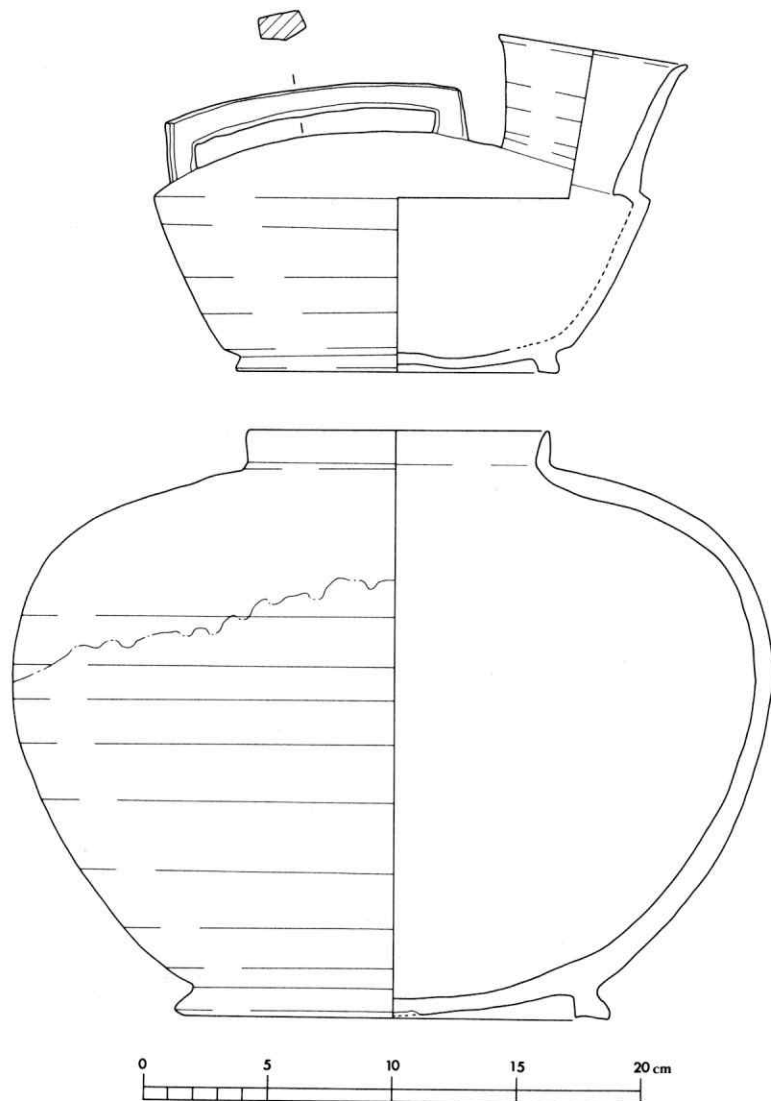
写真(2) 灰釉短頸壺

に集中している。

さて、火葬墳墓の発見された位置は守山東部丘陵の西端中央部の東へ入り込んだ谷奥に、西から見坂ケ池、竜巻池、緑ケ池と並んでいるいくつかの池のうち、中央の竜巻池の西に突き出した丘陵端部上にあつて、通称、離れ松とよばれる場所である。いま、仔細に現地を見ると、丘陵の突端部は見返りケ池に注ぐ小川が南北に分かれて東に入り込んでおり、その分岐点に小ダムが作られている。その小ダムから上った丘陵の末端の地点が火葬墳墓の発見地である。

3. 遺構と出土の状況

緑地公園事務所の小杉勉氏によると、3月23日、丘陵突端上の斜面を整地中、鞍部の少し上ったところの、地表面から50cm位下の位置から灰釉短頸壺と平瓶および杯が南北に並んで発見され



第3図 灰釉陶器実測図 上・灰釉平瓶，下・灰釉短頸壺

たという。そしてその南側に30cm位の範囲に亙って厚さ10cm位の灰と炭の層が見られたという。しかし、壺は赤土の中にあつて、灰は認められなかったと言うから、焼いた場所で、火葬骨を壺に入れ、その北に埋葬したのち、その北側に副葬品として、平瓶と須恵器の杯を置いたものと考えられる。但し、須恵器の杯は発掘中に採土に混じつて出土したと言ひ、副葬の場所は明らかでない。この杯はこの時期に通有な蓋杯の身の部分で、底部しかなかつたといひ、いまは失われている。

4. 出土の陶器類

(1) 灰釉短頸壺

口径12.35cm 最大径30.25cm 高さ23.8cm 底径17.3cm

発見当時、蓋が存在したが、いまは失われて存在しない。現地視察当時の調書によると、蓋はこの種の短頸壺に通有な扁平な宝珠形の鈕をもつた肩の垂直に折れるタイプのものである。身は口頸部が短かく垂直に立ち上がり、肩が大きく張つたこの時期の特徴をよく示したタイプの短頸壺で、高台は裾張りの強いものである。素地は黒い鉄の微粒子を含む淡褐色の猿投窯東部地区特有の土味を見せている。成形は紐土巻き上げづくりで、表面の胴の中央から下半にかけて木篋による横位の調整痕が残つている。

口頸部の一部と肩の全面に光沢のある濃緑色の灰釉がかかつている。正面（火前）の部分は灰釉が口頸部から胴下半まで流れ落ちるようにかかつていたが、永年の埋土中にあつて剝落し、下の素地が露出している。火裏は肩まで釉がかかり、ところどころ釉だれが見られる。正面に縦に一条の罅割れがある。

(2) 灰釉平瓶

口径7.6cm 胴上部最大径25.0cm 高さ13.5cm 底径12.8cm

太い口頸部をもつた平安時代初期独特の平瓶で、幅1.8cmの扁平な把手を上面につけている。素地は短頸壺と同様な猿投窯東部独特の陶土を用いている。成形は胴と上面を別々に作り分けて接合したもので、上面の内面中央は径4cmの孔を粘土板を当てて塞いでいる。高台はやや裾張りのあるもので、高さ0.8cmを測る。

口頸部内面および胴の上面のふくらんだ部分全体に灰釉がたっぷりとかかつている。上面のところどころに火ぶくれが見られる。

5. 結語

以上が寄贈された2点の灰釉陶器の出土状況と陶器に関する観察の詳細である。

この2点の灰釉陶器はいずれも愛知県猿投窯の製品であり、その素地から見て、猿投窯でも東部地域に属する窯の製品と考えられる。その形態から見て、9世紀初頭、猿投窯編年の井ヶ谷78号窯期から黒笹14号窯期にかけてのものと考えられる。

平安時代初期に属する火葬墳墓の一例として、ここに紹介しておきたい。

なお、図面作成については、当館学芸員・野末浩之氏および瀬戸市埋蔵文化財センターの協力を得たことを記し、謝意を表する。